

平成二十一年十二月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八三九号  
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

# 火星

平成二十一年十二月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

新藁の香にかかりゐる三日月

裏山は木の実しぐれや葛の槽

障子干しある猪の山の裾

水の辺に鶏の出てゐる冬支度

冬立ちし隔たりにある鶏頭花

冬菜畑弔辞の声のとほりけり

鳥影のつぶてのごとき冬菜畑

都鳥の羽音を被り籤買ひに

枯田道禰宜につきゆく二三人

雪来さうなり青鷺の肩の張り

# 太白星

柳生千枝子

さるすべり長き日月始まれり  
天道虫小さき髭をつけてゐし  
上弦を名残りの花火連打せり  
くりかへし良き刻還れ走馬燈  
朝顔の百の喇叭へ風触れ来  
ひらひらと雛罌粟畑別れの日  
虚子の碑の文字の窪みや露ぬれに

杉浦典子

桐一葉ひろふ真つ直ぐ歩ききて  
机の上暗し日向に糸瓜垂れ

人形座縛られ野分来たりけり  
月白の鶴橋渡りくるひとり  
まんぼうの水暗みたる野分中  
秋うららアドリア海の塩もらふ  
秋天へ灯台の階きしみけり

浜口高子

野分来るたくあん噛んでみてひとり  
天秤に九月の風の乗つてゐる  
海風にとびつきさうや牛膝  
宵闇や声上げて鳩潜りたる  
十六夜や籠屋は竹を細う細う  
鹿垣の潮さぶ崖に尽きゐたり  
印南野につまむ蝟螂胸厚し

# 火星作品

山尾玉藻選

露 拭 ひ し ば ら く 月 の 椅 子 と な る	上 り 框 の 虫 籠 に 敷 く 緋 毛 氈	九 月 来 る し だ れ 槐 の 影 の 中	白 に 水 張 つ て あ る な り 秋 収	鳴 く 虫 の 間 あ ひ 枕 を 裏 か へ す	荔 枝 の 実 弾 け し 窓 へ 声 か く る	登 高 や 一 湾 の 帆 の 没 り 日 い ろ	蔓 た ぐ る 糸 瓜 の 腹 を 引 き 擦 つ て	桐 一 葉 空 心 町 に 待 ち を れ ば	消 息 の 葡 萄 の 色 に あ り に け り	蝮 酒 に 色 の 来 て ゐ る 厄 日 か な	草 川 の 一 斉 に 伏 し 秋 つ ば め	蛇 穴 に 入 り あ つ あ つ の 明 石 焼	
		伊 丹 渡 邊 美 保					宝 塚 山 本 耀 子					明 石 戸 栗 末 廣	

水の辺のあたり明るし吾亦紅  
積み上げし薪に日当る秋の蛇  
秋風にひつぱられ立つ猫の耳  
有明の月あんこ屋に餡の湯気  
十月の潮で洗ふ魚の腸  
八朔や燕の群る蘆の音  
待宵の娘の炊きし強き飯  
燕去んで間門の扉のしづくせる  
金閣の裏へ回りし秋扇  
おとうとが目を逸らしたる榎櫃の実  
虫売りの座しゐし辺り萩は実  
新涼や波打際の蟹の穴  
露草の刈り込まれぬし地藏盆  
印南野や夜もゆたかなる稲びかり  
初鴨や水あぢはうて味はうて  
虫籠に残りし糞のかをりけり  
城郭の見えだんじりの衰へり

神戸深澤鱻

八幡大山文子

宝塚山田美恵子

# 選のあとに

山尾 玉藻

九月来るしだれ槐の影の中

渡邊 美保

草川の一斉に伏し秋つばめ

戸栗 末廣

九月半ばから十月初め頃、葭原や草原を燕が大群をなして飛びまわるようになる、彼らが南方へ渡る日もそう遠くない。掲句の「草川の一斉に伏し」とは、燕の鋭い飛翔に間髪をいれず川原の草々が大きく靡き返した一瞬を捉えた、非常にビビッドな表現である。草々の瞬間の激しい動きを描写することで、逆に帰燕の営みの迫力や緊張感が一層ダイレクトに伝わってくる。確かな自然観察と闊達な表現力から成った一句である。

蔓たぐる糸瓜の腹を引き擦つて

山本 耀子

ややぞんざいに蔓が手繰られていく様子から、この「糸瓜」は立ち木やフェンスに絡みついて大きくなったものだろう。「腹を引き擦つて」より、良く太った糸瓜が作者の手元へ大仰に寄ってくる様子が想像されて愉快。本来真面目な句風の作者であるが、近頃ではそれにほどの良い諧謔味がそなわって句に幅が生まれてきた。嬉しく頼もしいことである。

単に「九月」という呼称からは漸く秋らしくなった穏やかなイメージを抱きがちである。しかし実際の「九月」は、残暑の日もあれば台風も発生し、気象の変化の激しい頃でもある。ゆらゆらと揺れ続ける「しだれ槐」の影に立って、作者はなにとはなく不確かな思いを抱き、それが「九月」という取留めのない季節感に繋がったのである。

待宵の娘の炊きし強き飯

山田美恵子

嫁がせた娘が婚家の家風や娘なりの流儀で家庭を切り盛りするようになる、母親にとつてこれほど安心なことはいない。しかし同時に、娘がも早自分とは異なる道を歩み始めた寂しさを感じないでもない。掲句、娘が炊いた強いご飯を口にした途端、作者もそのような感慨を抱いたのであろう。月の出をこころ待ちにする思いにふと翳りが生じた。季語「待宵」が作者の胸中に微妙に反映し、一句の詩境は作者の思惟を超えたところにまで至っているようである。改めて俳句という詩形が有する力を思った。

(以下略)



# 恒星圈

同人 I

加古みちよ

岡 和 絵

金 澤 明 子

猫じやらし天王山に向きて揺る  
黒揚羽空地の草をすれすれに  
前脚のひとつうきぬる茄子の馬  
電線に横一列の燕去ぬ  
喘ぎつつ坂登りけり秋暑し

白百合のうち重なれる盆三日  
鬼灯を添はせて雨の魂送  
中山寺も荒神さんも星月夜  
朝顔の一と色描きの秋団扇  
地に還る塚の宝よ夜の秋

長 田 曄 子

河 崎 尚 子

ついと退きまた進む綺羅秋あかね  
夕刊の音に藤の実くぐりけり  
色鳥や孤独死といふ報せあり  
なつめの実噛みて明治の父のこと  
いちにちを終ふ茶熱く秋の夜

海へ向く鳥居の辺より踊歌  
秋の江へ翼傾げる鷹一羽  
在の名が苗字なりけり踊歌  
大原の紫蘇干す軒や秋さぶる  
羽根音の月竹林の奥にあり

# 獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

かりがねや裏戸に渡す心張り棒  
くぐり戸に張り紙のある月夜かな  
赤ん坊の四肢をふんばる豊の秋  
水落す千早 赤阪夕日なか

垣岡暎子

桐一葉覆はれてゐる姫路城  
葛の花川立ち上がり立ち上がり  
鼎談へかなかなの風吹いてきし  
秋立つや稲荷きつねの横顔に

松山直美

おしろいに屈める母に屈みけり  
虫籠を風にかざせし老眼鏡  
上り来て仏舎利塔や鰯雲  
秋蝶と墓地の住所を捜しけり

天谷翔子

秋天よりキリンが首をおろし来し  
月さしてマサイの土の家まろし  
秋の昼こごみ入りける土の家  
月さして蓋浮き上がるマンホール

助口弘子

花葛の風生れやすし吉野口  
ひと刷けの雲へ小鯨を釣り上げぬ  
鰯煮てゐて人の恋しかりけり  
青空の果てに夫ゐる草の花

白数康弘

くわりんほど石頭なる村の長  
馬追や足入婚といふがあり  
昼どきの酒をいささかみみず鳴く  
肯定も否定もせずや新松子

松井倫子

松茸山囲へる縄の湿りぬし  
水浴びの羽にぎはしき豊の秋  
厄日かな籠の鸚鵡の長し目に  
野分晴トーテムポールの先に鳶